

文化財の放射線対策に関する調査研究（保修12-12-1/2）

目 的

本プロジェクトは、主として2つの項目からなる。1つ目は、2011（平成23）年3月の福島県の原子力発電所の爆発により被曝した文化財の現状把握、調査手法、移動方法、除染方法等に関する研究である。2つ目は、放射線災害から文化財を守るための、事前準備、常時監視のあり方、事故時の緊急対応等に関する研究である。これらの研究を平成24年度、平成25年度の2カ年計画で行い、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめる。

成 果

本年度は、博物館・美術館の放射線量バックグラウンド測定及び展示資料の放射線量測定を、国立歴史民俗博物館、国立民俗学博物館、福島県文化センター白河館、福島県立美術館、九州国立博物館等で行った。この調査の目的は、文化財分野での測定法の検討、及び汚染を見極める基準値を明確にすることなどの基礎データとするためである。また、建物の構造と文化財施設内の汚染の関係を調べるため、福島県大熊町伝承資料館において、ガンマ線カメラにより、収蔵庫内のガンマ線の強度分布を測定した。換気扇近くが、ガンマ線測定量が大きく、収蔵庫内で放射線の測定値の大きかった収蔵資料は、この換気扇を通して流入した粉塵によると推測することができた。

3月11日に、東京文化財研究所会議室で、「文化財の放射線対策に関する研究会」を行った。参加者は、54名であった。プログラムは、1）石崎武志「研究会の趣旨説明」2）葉袋佳孝・（武蔵大学教授）「環境の放射性物質とその影響」3）溝口勝（東京大学）「農業分野での放射性物質による土壌汚染と除染の現状」4）丹野隆明（福島県教育庁文化課専門文化財主査）「福島県での文化財の放射線被害の現状」5）佐野千絵「博物館・美術館の放射線量バックグラウンド測定」6）総合討論、であった。総合討論は、活発に行われ有意義なものであった。3月12日には、文化財の放射線対策に関する調査研究プロジェクトチーム会議が開催された。ここでは、今後の方針が議論され、今後は、放射線量の測定方法、環境評価に関するWGと汚染状態の現状把握及び除線方法に関するWGを設置し、国立文化財機構内及び外部の専門家の協力を得て、具体的に検討を進めることになった。

研究組織

○石崎武志（副所長）、岡田健、佐野千絵、早川泰弘、木川りか、朽津信明、北野信彦、中山俊介、吉田直人、犬塚将英、早川典子、森井順之、佐藤嘉則（以上、保存修復科学センター）、山梨絵美子（企画情報部）、山内和也（文化遺産国際協力センター）

備 考

本研究は、所長裁量経費によるものである。



ガンマ線カメラでの測定の様子



研究会での質疑応答の様子